



静岡県西部、浜松駅から車で走ること約20分。訪れたのは丸八真綿本社に隣接する羽毛工場。丸八真綿の羽毛ふとんを一手に手がけているのがこの工場です。

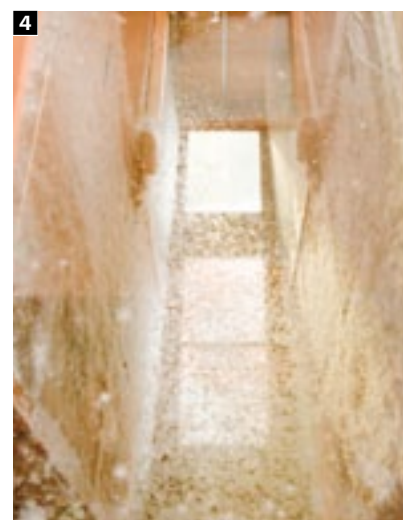
羽毛工場といっても、羽毛をふとんに詰めるだけではありません。ここでの作業は「原毛」を洗浄するところから始まります。最近ではコストや時間削減のため海外で洗浄済みの「羽毛」を仕入れるのがほとんど。国内で洗浄まで手がける工場は数えるほどしか残っていないそうです。洗いが足りなければ匂いが残り、洗い過ぎれば羽根を傷めてしまう。高い技術力が求められる洗浄は、羽毛の仕上がりを左右する最も大切な工程です。

北欧や中国など「ダウンベルト」と呼ばれる良質の羽毛産地から、厳しい目利きで厳選された原毛。工場で洗浄するにあたり、飼育環境やエサなどによって異なる原毛の状態を見極めるのが何より難しいと言います。洗剤の配合から洗浄時間まで、開発された独自の洗浄レシピはなんと数十種類。その都度、原毛の状態に合った最適なレシピを選び、さらに微調整を繰り返していくのだそう。



"原毛" から "羽毛" へー 作業工程

1届いたばかりの原毛の束。2除塵機でゴミなど異物を丁寧に落とし、洗浄します。3乾燥後は一定風速の風洞へ。風の力で重いフェザーを手前に落とし、軽いダウンを遠くまで飛ばし選別します。この工程を経て"羽毛"になります。4真っ白なふわふわの羽毛が舞う風洞内はまるで白銀の世界。5選別後の羽毛はミキシングなどを経て、羽毛の投入工程へと運ばれます。



ダウン 羽毛

1枚1枚、つくり手の想いが詰まった丸八真綿の羽毛ふとん。ふんわり、あったかの舞台裏を訪ねました。

マルハチの
ものづくり①
最高の「ふとん」を作るために。



羽毛の充填と口縫いの工程。
丁寧に丁寧に、女性ならではの細やかな手仕事です。

羽毛工場は、縫製工場の品質管理体制・製品の品質などについて
専門家による厳正な評価・認証を行う日本繊維製品品質技術センター
(QTEC)の認証を取得しています。(認証NO:QS 1 0 0 4-5 0)

「原毛も生き物なんですよ。どう育てあげるか。手間ひまを惜しんでいては、ほんとうにいいふとんはつくれません」原毛から羽毛へ。真っ白に洗い上がっていく様子を真剣に見つめながら、そう語るのは工場を案内してくれた磯部幸作さん。丸八真綿の羽毛を手がけて29年という大ベテランです。磯部さんの背中を見ていると、「羽毛ってつくるものなんだ」と、改めてつくり手の大切さを実感させられます。「どうぞ触ってみてください」そう促され、洗い上がったばかりの羽毛の山にそっと手を入れてみました。驚くのは空気のようなその軽さ。原毛の状態とはまるで別物。驚いているうちに両手にはじんわり、しあわせな温かさが。原毛特有の匂いもまったくありません。「洗浄一つでここまで違うんです。驚いたでしょ？」とちょぴり得意そうな笑顔を浮かべる磯部さん。羽毛に傾ける愛情が伝わってくる最高の笑顔です。



1人1日平均200枚ものふとんを仕上げるのだとか。その手際のよさにも納得です。



わずかな異物の混入も見逃さない専用機械で、工程毎に安全性をチェックしています。

さはもちろん、正確さとスピードも求められる厳しい現場です。ダクトを通った羽毛が、グラム単位で計測されどンドンふとんへとその形を変えていきます。ダダダダッとリズムカルに響くミシンの音。みんな一心に手元を見つめ、フロアには凜とした空気が漂います。あつという間にでき上がっていくふとんの山。そのあざやかな手さばきは、さすがの磯部さんも舌を巻くほど。「彼女たちには敵いません」と頭を掻きます。

羽毛の詰めムラや、縫い目のほころび等をチェックする磯部。ベテランの厳しい目が光ります。



「手間ひまを惜しんじやいけない」
大切なのは妥協しない、流されないこと。



仕上げから梱包まで、とにかくすべてが手作業。
1枚1枚「どんなお客様のところへ行くんだろう」
と思い描きながら、もくもくと作業は続けられます。



若手もベテランも。「想い」はみんなおんなじ。

受け継がれてゆく
つくり手の技と魂。

「二人ひとりがプロのつくり手であること」。ほとんどの作業が手作業となる丸八真綿のふとんづくりには欠かせないキーワードです。品質を維持し続けるためには、若手を一人前のつくり手に育てるのも大切な仕事。「ある程度まで教えることはできてあとは経験。何度も何度も仕上がりをチェックしながら、一人ひとり育てていくしかありません」そう言う磯部さんも同じように何年もかけて先輩に育てられてきた一人です。

すべてのお客様に100%満足いただけるものをお届けする。その想いは若手もベテランも同じだと磯部さんは言います。「お客様は最高のふとんだと思って購入されるわけですから、その期待を裏

切るわけにはいきません。いつも『想像以上』と驚いてもらえるものと思っています」。

素人目には分からない小さな縫い目の歪みすら見逃すことなく、何度も何度も厳しい品質検査を繰り返し、ようやく完成する丸八真綿の羽毛ふとん。「長年使い続けてもほつれにくい」「羽毛がへたりにくい」そんなお客様からのうれしい声こそが、その品質の証し。「気持ちよく使い続けていただくために私たちもどんどん技術を磨いていかないと」と磯部さん。つくり手の技と魂は、また今日も大切に受け継がれていきます。



女性チームを率いるのは、ベテラン壁屋。「ほら頑張って！遅いにー！」今日も壁屋の元気なかけ声が響きます。